山びこ通信

2月号 2006.2.21
「クラス総括」

『よみきかせ』について

数学クラス担当
下村 昭彦

科目を問わず、勉強にとって重要な能力とは何でしょうか？ 記憶力？ 計算力？ 理解力？ いろいろありますね。私は最も重要なのは読解力ではないかと考えています。つまり、問題文を読み解く力。それは、英語でも国語でも社会でも理科でも、そして数学でも同じです。私は今までいろいろなところで数学を教えてきましたが、数学においても最も重要なのは読解力です。それはなぜでしょうか。

ここで、「問題を解く」という行為において必要な力について考えてみましょう。まず、文章を読めなければなりません。あたりまえですね。数学は「～を求めよ」といった短い問題文が多いですが、逆に文章題では他の教科より長くて複雑な文章で出題されることも少なくありません。その際にまず必要なのは長い文章を読む体力です。問題文を読むことを途中で投げてしまっては、当然問題を解くことはできません。

次に必要なことは、問題文の内容を理解することです。A という条件と B という条件があり、時点 C までは A が時点 C から D までは B が適用される。さらに D 以降は A、B のいずれも適用されない。といった複雑な条件が設定されていることは、高校入試の問題でもよく見られます。この場合重要なのは、時間の経過に沿って条件が変わることをイメージできるかどうか、ということです。また高校生の分野でよく見られるものが場合わけです。場合わけも条件がいくつもあると混乱して何をすればいいのかわからなくなる生徒が少なくありません。この場合には、条件を整理して、問題を考える際にいったいどの条件が問題になっているのかを考える必要があります(当然ですが、考えるときに二つ以上の変化を理解することは困難です。ひとつひとつ考えていく必要があります)。問題の内容を理解して整理すること。これが 2 番目に重要なことです。

そして、3 つ目。出題者が何を問いたいのかを推察することが必要です。これはすなわち行間を読む力です。なぜこのような式でこのような条件が設定されているのか。どういう計算をさせたがっているのか。自分のどのような能力を問われているのか(計算する体力か、論理的思考力か、etc...)。出題者の意図がわかれば、おのずとやるべき行動が見えてきます。頭の中で出題者の思考を繰り返してみればよいだけです。

さて、読解力が必要なことはわかりました。じゃあ、どうやって身に付けるのか？ これはもう、文章に繰り返し触れる以外ありません。英語が得意になるにはどうしたらいいでしょう？ 何度でも、覚えるまで英文を読みますね。何種類もの英文を読みますね。その過程で語彙を覚え、文法を理解し、いつしか初めて読む英文を読解できるようになります。数学的文章にしても然りです。(子供のころ、計算ドリルで苦労しましたね。あれは、「数学」という言語の語彙を覚えさせられていたわけです。)

ではそもそも、読解力とは何でしょう？ 私は、「イメージする力」だと考えています。文章はストーリーです。読解力があるとはすなわち、書かれた文章から具体的なストーリーをイメージできる、ということを指します。私が文章を理解するときには、自分が主人公であるところを想像し、まるで映画のように文章を頭の中で再現します。これは私のやりかたですから、音楽としてイメージする人もいるかもしれませんし、一枚の絵画としてイメージする人もいるかもしれません。いずれにせよ、ストーリーがイメージできるということが最も重要です。(そして、登場人物に感情移入するということも重要です。数学でたとえるなら、1 分に 1㎝ の速さで頂点 A から頂点 B まで移動する点 P の気持ちになりきるのです(^-^))

文章からストーリーをイメージするのにいきなり数学の文章から入るのはなかなかつらいものがありそうです。というわけで、やっぱりオーソドックスに物語を読むところから始めましょう。物語を読んで、主人公になりきって、ストーリーを楽しむ。いいですね。私の大好きな娯楽のひとつです。ところが、読書が嫌いな子どもがたくさんいます。そもそも読書する習慣がないのです。どうして読書が習慣づかないか。ストーリーを楽しめないからです。なぜか。感情移入できない、場面が想像できない、などやはり「イメージする力」が欠けているからです。(次ページ)

ホームページ http://www.kitashirakawa.jp/yama.html 電子メール taro@kitashirakawa.jp
電話 781-3215（山の学校） 781-3200（幼稚園） / FAX 781-6073（山の学校・幼稚園共通）

さて、ここからが本題です。「イメージする力」を身に付ける上で重要なことはなにか。私はそれは幼児期の読み聞かせであると考えています。文章を読めない小さな子どもでも、大人が読んで聞かせてあげればストーリーを楽しむことができます。読み聞かせのときに声色を変えてより臨場感を出してあげると、さらに楽しめます。鬼が出てきたら怖い声、犬が出てきたら楽しそうな声。子どもたちは読んでもらっているストーリーから、とてもリアルに場面を想像します(絵本であれば、絵もそれを助けてくれます)。そのときの、楽しい思い出、言葉を聴きながら場面を想像した記憶。それが、魂に染み付いて力となって大人になってから読解力となります。私は、子どものころに親が読んでくれた絵本のストーリーやそのときの声色、怖い場面でないた思い出、今でもはっきりと覚えています。

お父さん、お母さん、子どもが絵本を持って読んでほしいと言ってきたら、忙しい中でもぜひ読み聞かせをしてあげてください。幼児期の英語教育や情操教育もいいでしょう。でも、両親から愛情たっぷりに聞かせてもらうお話ほど子どもにとって楽しいことはありません。寝る前の 10 分でいいのです。読み聞かせは、大人にとっても楽しい思い出となり、そして子どもにとっては思い出であるとともに大人になってからのかけがえのない財産なのです。

（文責　下村昭彦／数学クラス講師）

時間割　冬学期（平成１７年度１２月～３月）

＊１８年度・新学期の時間割については、次号３月号をご覧下さい。

（各クラス５名まで）

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん＊ （低学年＆高学年）	ことば低学年１年 ことば低学年２年 ことば高学年	中１・数の基本 中学・英語の読み書き 高校・日本語の読み書き	中学・日本語の読み書き 高校・数の世界Ｂ
水		かず低学年	中１・英語の基本	ラテン語講読 A ラテン語購読 C 高校・数の世界Ａ
木	かず中学年	かず高学年	中３・英語の基本 高校・数と自然	中３・数の基本 ラテン語初級入門
金	やまびこクラブ 4:00～5:30　（年６回）		青春ライブ授業！ 7:00～8:30　（年６回）	ラテン語講読 B

＊「しぜん」は、３：５０～５：２０、隔週の授業です。

小学生の部

『ことば』	低学年（1 年）	山下太郎
	低学年（2 年）	宇梶 卓
	中学年（3･4 年）	——
	高学年（5・6 年）	某
『しぜん』	低学年（1･2 年）	山下育子・山下太郎
	高学年（3～6 年）	山下育子・山下太郎
『かず』	低学年（1 年）	下村麻紀子
	中学年（2･3 年）	福西亮馬
	高学年（5～6 年）	福西亮馬

講師が「——」のクラスは、希望者を５名まで受け付けます。希望者が２名以上集まった時点から、上記の講師陣により授業が開始されます。

中学生の部

『日本語の読み書き』	中 1～3	某
『英語の基本』	中 1	下村麻紀子
	中 2	——
	中 3	山下太郎
『英語の読み書き』	中 1～3	Fujita
『数の基本』	中 1	宇梶 卓
	中 2	——
	中 3	下村昭彦

高校生・一般の部

『日本語の読み書き』	高 1～3	某
『英語の読み書き』	高 1～3	FUjita
『数と自然』	高 1～3	下村昭彦
『数の世界Ａ』	高 1～3	福西亮馬
『数の世界Ｂ』	高 1～3	福西亮馬
『ラテン語初級入門』	高～一般	前川 裕
『ラテン語 講読 A』	高～一般	山下太郎
『ラテン語 講読 B』	高～一般	山下太郎
『ラテン語 講読 C』	高～一般	前川 裕

クラス紹介

早いもので、「山の学校」も３年を過ぎようとしています。日頃ご支援下さっている多くの皆様のおかげと感謝申し上げます。さて、今月号の「山びこ通信」では、平成１７年度の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのか、クラス便りを寄稿していただきました。

まるで幼稚園の子どもたちが夢中になって砂場にもぐって穴を掘るように、「山の学校」では、大人も子どもも時間を忘れ、真剣に勉強に向き合う時間が流れています。和気藹々（わきあいあい）と「学びの山登り」を楽しむクラスの様子を感じ取って頂けたら幸いです。（山下太郎）

―小学生の部―

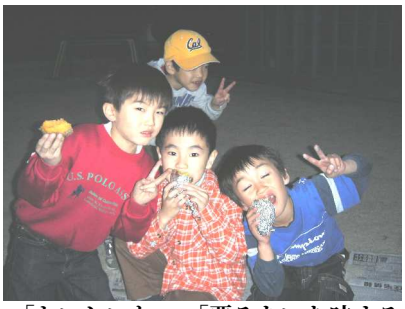
「しぜん」　担当 山下育子・山下太郎

『冬学期をふり返って』

――１２月のあるクラス　　テーマ“ 焼きいもをしよう ”

① (焼きいもの材料)山奥で枯れ枝、枯れ葉あつめ　→　②火を起こす（マッチの使い方）→
③ 焚き火を楽しむ　→　④火の活用(安納芋を火にくべる)　→　⑤成果をいただく喜び

「こうして空気が通るようにして」


「おいしいねー」「栗みたいな味する」

陽は暮れてきたけど、お芋は温かい！

この日('05.12/6)、クラスの前半では「しぜん日記ファイル」を１人１冊ずつ作成しました。これから真冬を迎える季節の中で、気づいたことを少しずつ「しぜん日記」として文章で記録していきます。と同時に、ヒヤシンスの花の球根と水栽培用の容器を１人１セットずつ持ち帰ってもらい、お家で容器に乗せた球根の下すれすれまで水を入れ、机の上等で、根、芽、茎が伸び、やがて蕾ができて花が咲くまでの成長の様子を、楽しみながら観察記録(絵と文章)をつけていくことをお話しました。

――１月のあるクラス　テーマ“ 新春きもだめし！ ”　～自然の中でソロを楽しむちょっとした勇気～

この日も、先ず、冬休みの思い出話やクラスに届いたしぜんのお土産話に花が咲きました。そしてヒヤシンスの根がビンの下まで長く伸びて芽が出てきたこと、蕾が出てきた様子など、それぞれの観察記録はオリジナルの楽しいものでした。カラフルな色使いで描いた何枚もの絵、緑色の芽が５センチ伸びた、白い根は１１センチ伸びた等とても具体的でした。

しぜん日記では、家族で水族館に行ってきれいなサメを見たこと、美味しいカニを食べたこと、お父さんと焚き火をしたこと、雪の日の外出が大変だった事など、冬休み中の楽しい思い出がいろいろ書き留めてあり、すべて皆で見せ合い中間発表をしました。

それではここから、クラス後半です。いよいよ、お楽しみの“新春きもだめし！”をはじめます。冬のことですから、太陽はすでに西に傾きつつある午後４時過ぎになっていました。

「ひみつの森は久しぶりだけど、今日は今までのようにみんな一緒に行くのではなくて、勇気を出して一人っきりでお庭から森の広場まで行ってみようと思います！」と言うや、口々に、『えー！無理や～！』『こわいよー！』という声。

「それじゃ、ぼくは一人で行ける、行ってみたいという人、手をあげてみてください？」
『・・・・』(しーん) 「あらら？５分ほどであっという間に着いちゃうんだけどなあ。行ったことがあるところだし、先に太郎先生に森に行って待っててもらうことにするけど、無理かなあ？」
『う、うん』『ムリ・・』と、容易に首を縦には振らず、なかなか用心深い子どもたち。

「それじゃこうしましょう！　二人一組で友達とペアになって手をつないで森まで行くことにするのは？」と言ったら、『やったー！ そうしよう！』と、全員一致の屈託のない声が一斉に返ってきました。やはり仲間と一緒は心強いのです。

早速、園庭で並び、まだ明るい森の中へ意気揚々とペアになった者同士が「行ってきまーす!」と、１、２分間隔の時間差で、森の中へ駆け込んで行きました。そして、最後のペアが森の広場に到着した後、隠れんぼをしたり木の枝を拾って暫く時間を過ごしました。

「そろそろ、お山の教室へ戻る時間になったね。ちゃんと間違えずに二人で来れたけれど、今度は一人で帰ってみようと思う人はいる？」と尋ねると、ほとんど全員が手を挙げて『はい！　僕、僕』と、先程とは正反対の返事。とても積極的です。そこで、先に園庭まで駆け戻り、子どもたちを待ち受けていると、見事に全員が１分間隔を空けて悠々と走りながら笑顔で帰還してきました。でも、やっぱり戻ってくるまでの道中は、
――誰かが後ろからついてこないかな？　何かが横から飛び出してこないかな？
頭の上から鳥の声なんかが突然聞こえてこないかな？――等の思いがよぎったことでしょう。

ふかふかの落ち葉の絨毯の山道を、自分の足早に急ぐ音だけが響く一瞬一瞬・・・。一人っきりになりふと立ち止まった時の辺りの静寂・・・。いつもなぜかちょっぴりヒヤッとするお地蔵さんの後ろ姿を横目にかけ抜け、ペアで来た行きよりも数倍五感を引き締めて、走って約５分の道のりを戻ってきた時には、一人一人が生き生きと事を成し遂げたよという満足の面持ちで溢れていました。
今回実行したようなミニ体験は、きっとどこか記憶の隅に残ることでしょう。多少の危険や不便があれば、いつも大人の側で排除するというより、子ども自らでその対応能力を身につけていってほしいと願っています。冒険に挑もうとする子どもの勇気を、細心の注意の元に温かく見守る姿勢を持てたら何よりだと思います。

ソロ体験の大切さ

一人っきりになり、静かに自分自身と対話する機会は大人にとってもあるようでなかなかないものです。一人静かに目を瞑り、ゆっくり深く深呼吸を続け、脳幹のストレスが開放されたときにも本来の素直な自分、あるべき姿に気づくことができます。

子どもにとっては五感を敏感にさせ、生きる上で大切な不思議や驚きを感じる能力(センス・オブ・ワンダー)を取り戻す生きた体験であり、頭ではなく心の目と自然との深い響き合いが可能なソロ体験。お庭の片隅で、また、朝の鳥のさえずりとともに空を見上げるひと時を持つなど、安全が確保できる範囲内でソロ体験させてあげたいものです。

――２月のあるクラス　　**テーマ“ ぼくらは、しぜんカメラマン！”**

いよいよ 2 月に入り立春を過ぎました。皆のしぜん観察日記 “ ヒヤシンスの成長 ” は、すでに花が咲き(赤、黄、青、白など)、そして枯れ、再びその脇から新たな芽が出て小さな花が咲こうとしている様子など、表現豊かな文章と絵入りの日記が毎回届けられています。覚えたての平仮名、片仮名、漢字を使い、一生懸命努力して 1 枚ずつを大切に仕上げていることが伝わり、皆な本当にがんばり屋さんだなあ…と感心しています。ご家庭でのお母さまのご協力も見え隠れし、とても有り難いことです。

この日は、午前中から大変な荒れ模様の一日でした。晴れ間が出たかと思うと、氷混じりの雪が降ったり、曇ったり、また晴れたりの繰り返しでした。しぜんクラス前半を終えた頃、ようやく西の空から太陽が顔をのぞかせてくれたお陰で、今日は予定通り自然の中へ出かけることができそうです。お山の自然を撮った数枚の写真を皆で観賞している間も、私たちを迎える準備が整ったことを知らせてくれるように、市街が臨める西の窓の方から、眩しいほどの西陽がさんさんと注ぎ、皆の顔を明るく照らしていました。目を細めて自然の美しさを十分に受け止めたところで、一人一人がインスタントカメラを手にしました。

「きれいだなあ」「面白いな」というものに出会ったときだけ、わきを締めて焦点をしっかり定めたら、シャッターをゆっくりと押す…というお約束をしました。そして、出発です！

＜夏ミカンの実＞　夕焼け空をバック

＜サクラの枝＞　青い空をバック

＜モクレンのつぼみ＞吉田山バック

＜森の中＞
風の音？ 水の音？ 木が水を吸い上げる音？

ミニカメラマンたちの写真

＜ツチグリ＞
キノコを撮る仲間を撮影

西陽を背に、今日も分け入った“ ひみつの森 ” の中に、いつもと違うルートを見つけ、落ち葉で覆われた大きなお椀のような斜面の懐の中で、高い木の生命力を感じるように体を寄せ耳を当てて音を確かめてみたり、遠くに聞こえる鳥や犬の声を耳にしたり、さらに奥へ続く道を見つけて珍しいキノコを発見したり、森のあちらこちらでミニカメラマン達の歓声が響き渡りました。一人ひとりが大いにエンジョイして時間の経過を忘れてしまうような豊かなひと時を共有できたことは、私自身とても貴重な思い出となっています。

＊＊子どもにおすすめの自然体験＊＊

・夕焼けと日の出を見る　・風に吹かれる　・森の中を歩く　・火をつけ焚き火にあたる
・雨の中を歩く　・水をまく(植物に水をあげる)　・暑さ寒さを肌で感じる(氷雪体験はとてもよい)etc.

（文責　山下育子）

「ことば」１年生　　担当　山下太郎

冬学期初回のクラスでは、毎回授業で用意するプリント（A4）が散逸してはいけないので、簡単な紙製のバインダーを用意しました。俳句や作文など、クラスで配る紙に書いてもらう作業も、全部日付を書いてこのバインダーに綴じてもらっています。

冬学期最初の課題は、秋学期に扱った『ちびゴリラのちびちび』という絵本の文章を全部紙に書き写すことにしました。あらかじめタイプしておいた絵本の文章（全部で A4 一枚の紙に収まります）を子どもたちに配り、その印刷された文字をよく見て正確に写し取る練習に取り組んでもらいました。全部ひらがなとはいえ、一字一句間違いなく書き写すことはなかなか難しく、根気の要る作業です。しかし、子どもたちの集中力には驚きました。時間の許す限り、実に根気よく一字ずつ文字を書いていきました。文字通り、鉛筆の音だけが聞こえる時間は、時計の針が止まったようで、神聖にさえ感じられました。

このときの課題の取り組みも、しっかりバインダーに閉じてあります。思い出のスナップをアルバムに閉じるように、勉強に取り組んだ思い出の一こま一こまも、大切に保存していきたいと思っています。幼い日の真摯な学びの取り組みの記録は、いつか自分への大きな励ましになる日が来ると信じられるからです。

（文責　山下太郎）

「ことば」２年生　　担当　宇梶 卓（まさる）

小２の「ことば」の授業では、おもに名作と言われる絵本・童話を読んできました。

「ことば」の授業は本来、美しい「ことば」に慣れ親しむことを主眼としていますが、それには実際に読んでみるに如くはありません。それも声を出して元気に音読することが重要です。子どもはとりわけ頭でよりも身体で物事を覚えるところがあり、それは勉強という点でも変わらないと思います。大きな声で元気よく名作の文章を読むことで、ことばの一つ一つが身体に浸透していく。そしてふとしたときに、身体で覚えた名文を口にする。そういう図式があるのではないでしょうか。

そういった理念で一緒に絵本を読んできたのですが、しかし当然ながら、最初からスラスラと読むことができる人はいません。みんな当初はつっかえたり読み方を間違えたりと、悪戦苦闘しながら読んでいきます。聞いている分にはたいしたことは無いのに、いざ自分が読むとなると、「量が多いよー」と音を上げる子がいたりします。そういうとき、僕は「ゆっくりでも、間違えてもいいから、がんばって最後まで読んでいこうよ」と励ますことにしています。文章を読むというのは、子どもたちにとっては、山の学校の長い長い階段を登っていくようなところがあるのかもしれません。だからこそ、最後まで読み終えたときの達成感はひとしおなのではないでしょうか。実際、授業が進むとともに生徒たちの読み方が、少しづつではあるものの、着実に向上していく様子を垣間見ることができました。

無心になって物事に取り組むことができる今だからこそ、たくさんの本を一緒に読んでいくことが重要だと痛感した次第です。

（文責　宇梶卓）

「ことば」5～6 年生　担当 某

「なぜかというと」

ことばの小学生クラスは、この一年アランの『四季をめぐる 51 のプロポ』というエッセイ集を読み、それについて論述をするという作業をほぼ毎回繰り返し行いました。春に軽い気持ちでテキストに選んだのですが、これが意外に難物であることが徐々に判明し、また随想という慣れない形式の文章について考えたことを述べるという作業も少しハードルが高かったかもしれません。授業中の課題や宿題として、テキストに基づいた問題について書いてもらった文章を見ると、たとえば作者の言葉のひとつを引用して「それは…である。」の 2 行で終わったりしているものもまま見受けられました。

そこで、冬学期の授業では生徒が「…である。」と書き終えたときに、すかさず「なぜかというと」「その理由は」と言ってみました。主張したいことや意見には、その「根拠」「理由」が必要です。それはテキストを良く読み、悩み、考えないと出てきません。答えはひとつではないので、「自分はこうだと思う」と書いたら、その理由をしっかり書けるようにすることが次の課題になるだろうと思います。

秋学期からは漢字検定 4 級の問題集を解き、冬学期まで継続して 4 ヶ月ほどで一冊終了しました。漢字は復習が大切なので、定期的に復習テストも行ないました。一回目のテストは初見なので致し方ないところもありますが、復習テストでは頑張って合格点（7 割）を達成して欲しいところです。努力した人は、それが確実に反映されます。

とりあえず問題集は一冊終わりましたが、しばらくの間はおりおり確認の小テストなどをしてゆくつもりです。「なぜかというと」復習しないと忘れるからです。復習しても忘れることはありますが、全くしないよりは記憶にもよく残ります。

（ 某

「かず」１年生　担当　下村麻紀子

「すうじとのかかわり」

かず初級を担当させていただいています、下村麻紀子です。１年間を一緒に過ごして子どもたちの吸収力と成長の大きさに驚かされました。

最初は数字との関わり方や勉強の仕方がわからず、友達と話すことに専念することもありました。しかし今では『遊び』の時間と『勉強』の時間をきちんと分けることができています。この時間の区別ができることはすごく大切です。自分が今何をすべきか、きちんとわかっている証拠です。単純な１つの計算問題から、14－8 のように 14 を 10 と 4 に分けてから考えるなど、複雑な計算問題も自分でできるようになり、もしつまずいても１つ２つの助言を与えられると自分で答えを見つけ出すことができるようになりました。

これからたくさんの物事を吸収していく年齢だけに、今のこの成長の大きさは自分で考えることのできる人間に大きく羽ばたいていくような期待を感じられます。
また、そばで子ども達の成長を目にしていくことで私自身もいろんな発見や成長をさせていただいたと強く感じています。

１年間本当にありがとうございました。

（文責　下村麻紀子）

「かず」　2～3年クラス　5～6年クラス　担当　福西亮馬

「うれしい人」

風邪をこじらせた子どもにとって、「代わりにひいてあげられたらいいのにねえ」と言いながら、看病をしてくれる人はありがいものです。自分の直面している出来事に対して、文字通り「親身」になってくれる存在は、大人が思う以上に子どもにとっての慰めです。それだけにしてあげる方もまんざらではなく、自身、誰かの手が襟元に毛布をかけ直してくれた薄明の感覚を憶えているせいか、同じことをしてあげようと思います。

子どもの勉強に付き合う最中も、もしかしたら同じことを思うのかもしれません。「代わりに解いてあげられたらいいのにねえ…」と。でもそれができないから困ります。

子どもが特に苦手な問題で、間違った答や当て推量を連発するのは、教える方にも、じれったいものがあります。もちろん自分の頭で正解に至らねばならず、誰かが代わりに考えてあげるのではその力がつきません。かといって、「自分でやってみなさい」と言ったが最後、他人の必要を認めないとすると、それもまた間違いに陥ります。まさに「自分でやってみなさい」と言うその人が必要なのです。

子どもが何らかのサインを出している時、振り向いてくれる人、応じてくれる人、こういう人たちは、子どもにとって「うれしい人」です。

子どもは、そうした人たちを押してみて、はね返って来る反応を期待します。その期待が満たされると、「よし次も！」となります。それだけに空振りによって、だんだん期待する気持ちが薄くなり、こちらが期待していることもやらなくなります。子どもに期待するからこそ親であるように、親に期待するからこそ子どもでいるのです。教育は諸刃であるとよく言われますが、この子どもへの対応をどれだけ増やすか、減らすかによって、まっすぐ伸びる可能性を、そのまま発揮させることも、させないこともできるのだ、と強く言うことができます。

「勉強は自分でするものだから、一人でしなさい」というのは正論ですが、「自分で」＝「寂しい」というイメージを付着させるなら、それは「勉強嫌い」になる風邪のひきはじめであるように思われるのです。

学課に限らず、どんなことにでも途中で苦しいことが待っています。それを乗り越える最中、ふと何かのひょうしで心の中に「うれしい人」の面影や声が浮かんだ時、その時にはじめて、人はどんなことでも続けていける、その支えを感じるのだろうと感じます。何事もそれのみならず、それを通して、人間が見えることが大事なのだろうと思います。

一時間という枠の中で、私が子どもたちとのかかわりを通して応援したいのは、他ならず、ご家庭での取組みであり、小さなドラマの連続なのです。子どもたちが「家で、あれ、できるようになった」という声を吸い上げて、「そうか。お母さん（お父さん）に見てもらったんか、よかったなあ！」といった声をかけてあげられることなのです。

そのことをご理解下さって、ご家庭でなさる勉強の「枠組み」として第三者の力を必要とし、山の学校に預けて下さるのであれば、その効果は二倍にも三倍にも増すものと強く信じます。

（文責　福西亮馬）

―中学生の部―

「中学・日本語の読み書き」　担当 某

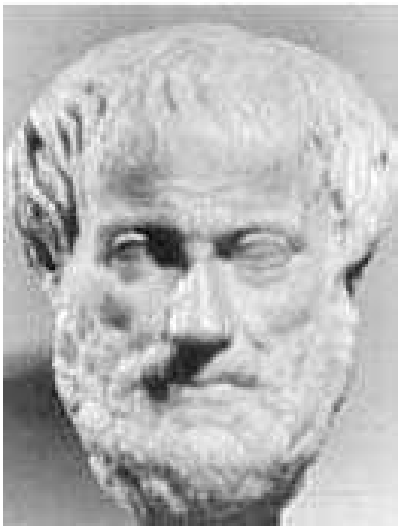
「これ、おかしいやん」

中学生クラスは、アリストテレスの『弁論術』を読み、その内容について自分の意見や考えを記述すること、あるいは討論をすることを毎時間しています。テキストは分厚く、一年では終わりませんでした。来年に持ち越しということになりますが、この『弁論術』が分厚い理由は、理論や概念の枠組みだけを提示するような（要するに難解そうだなという先入観を与えてしまうような）書物であるのとはちがって、具体的なできごとやものごとを逐一挙げて、網羅的であるためです。

たとえばひとつ例を挙げると、「よいこと」とは、具体的にはこれこれこういうことで、これはよいことである、これはよいことである、あれもよいことである、というような感じです。ですから、「よいこととはなんだろうか？」という一見抽象的なことについて考えているように見えながら、実際にテキストを読んでいくと、そこに示されている具体的な例のそれぞれについて考えることになる、つまり経験的に「よいこと」とはどのようなことかを考えることになります。これらを考えながら論述を行なうわけですが、読むテキストの内容が具体的であるだけに、自分自身の体験や考えに結びつく可能性も多く、見かけの分厚さほどにはとっつきにくくない書物であると思います。

そして、中学生クラスでは論述をしたものを生徒が交換して互いに批評・添削しあう形式をとっていることは去年からと同様ですが、そのレベルは格段に上昇しているといってよいと思います。テキストをしっかりと読んで記述するようになったことはもとより、互いが書いた内容についても尊重しあい、そして納得のゆかない部分に関してはよく議論するようになっています。「これ、おかしいやん」と言えることは、自分の考えが一応であれ形作られているということを示しているわけで、そのうえで相手からの指摘を受け入れたり、あるいはさらに反論したりしながら、悩み、再考し、より確固とした考えを作っていくわけです。無着成恭の言う「概念くだき」まで、あと一歩です。

（某）



日本語の読み書き

中学生　火曜日　pm８：１０～９：３０
高校生　火曜日　pm６：４０～８：００

毎授業、テキストを少しずつ読破しながらそれに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今もそして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

「中１英語の基本」 担当　下村麻紀子

「普段使いの英語」

中１英語を担当させていただきました下村麻紀子です。
中１で習う英語は本当にこれから中学 2,3 年や高校、大学、社会で使う英語の基盤となるところです。今十分に英語に慣れておかないと先でつまずく危険もある大事な時期にあたります。逆に今慣れておくことで普通に横文字レベルでも、英語を使うことができるようになると思います。
だからこそ、後半では教科書の丸覚えや教科書の範囲内での小テストや課題を重視していました。中１では教科書から一歩進んだことではなく、いかに教科書をきちんと覚えているかが重要だと感じているからです。
今勉強していることが将来大切だと言われてもすぐにはピンと来ないと思います。だからこそ将来『やっていてよかった』と思えるように手を差し伸べてあげたいと考えています。
プリント１枚の宿題をやってこなかったり、辞書や教科書を忘れたりすることも時々はあるでしょう。その大切さに気づけたとき、本当の意味での勉強が始まるのだと思います。
中学という自分にとってもそう遠くない過去の話を子ども達の会話で感じることができ、私も童心を思い出すこともあります。懐かしさと共に先に進むことへの期待や不安を一緒に感じ取れたら、と思っています。
１年間本当にありがとうございました。

（文責　下村麻紀子）

「中３英語の基本」 担当　山下太郎

クラスでは入試の対策を中心に進めていますが、高校に入ってから後に差のつくのは、長文読解力と正確な和文英訳の力です。
高校に入ってからも英語の力がどんどん伸びるように、学習上のポイントを上記２点に絞って取り組んでもらっています。

まず、長文問題については、実際の入試問題をどんどん解くのが一番です。
高校入試の場合、単語は平易なのですが、辞書なしで読むことに慣れていないと、読んでいる途中で「息切れ」してしまいます。日頃トレーニングしていないと、長距離を走るとすぐにバテるのと同じです。多少わからない箇所があっても気にせずに読み続ける態度が何より大切です。
これは意識しないとなかなか練習できません。学校や一般的な塾の授業で扱う英文については、細部に至るまでじゅうぶんな説明が行われるため、同じ「英語を読む」といっても、短距離走を繰り返すような趣があります。
しかし、実際の入試で問われる長文読解は、そうした短距離走的な英文の読解（＝精読）とは「種目が違う」わけですから、入試の英文を読むコツ（＝速読のコツ）は、結局の所、自分で会得しないといけない仕組みです。陸上のトレーニングと同様に、何より大事なのは毎日決められた分量を必ず読むこと、英語を読む習慣を身につけることです。その意味で、長文の問題集は英文読解用のよい教材が満載です。毎日コツコツ問題をこなし、一冊、一冊仕上げていくと、高校に入ってからも英語を読むのが苦ではなくなります。大学受験生でも、英語の長文読解に自信のない人は、まずは高校入試の問題を片っ端から解くことをお勧めします。

次に英作文の問題についてですが、私がお勧めするのは典型的な例文（現在完了や関係詞など）を日本語から英語に直す練習です。
綴りも含めて正解できるよう練習を重ねます。高校英語の勉強ではこうした単文の正確な作文能力

が勉強の基礎になります。高校に入ると多少長めの日本文を英語に直す練習が出てきますが、生徒にとって、長いセンテンスをいきなり英語で表現できなくても、それを短い英語の組み合わせに分解できれば自分の力で英語が書けるようになります。鍵になるのは、元になる単文を正確に英語に直せる力（＝中学で学ぶ基本例文を英語に直せる力）であり、この力がなければ、高校時代に大きなハンディを背負うことになります。

このような考えから、今クラスでは、英語学習の最重要ポイントを大事にしながら、入試に向けて最後の追い込みを続けているところです。

（文責　山下太郎）

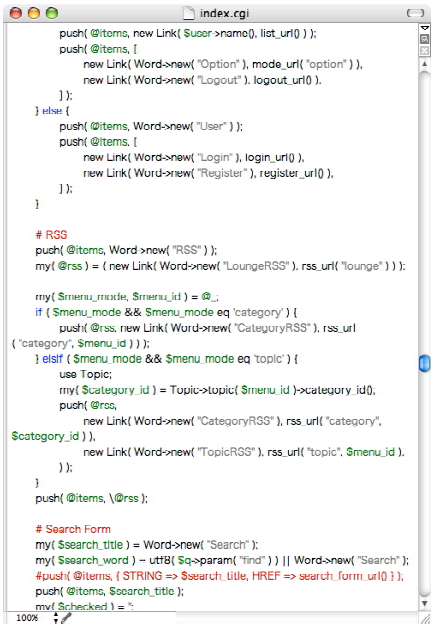
「中学・英語の読み書き」　担当 Fujita

受験間近の中学 3 年生には、高校受験を意識した課題に加えて、高校入学後にも役立つように授業を実施しています。高校受験は、中学校で学習した膨大な内容の総まとめになります。中学校の内容には、覚えているようで覚えていないような基礎的な項目が多く含まれています。例えば、不定冠詞（a, an）、定冠詞（the）、無冠詞の使い分けや、some と any の区別などは中学校の極初期の段階で学習しますが、大人でもよほど英語が得意な人でなければ正確な説明はできません。このような題材は、中学校の教科書をめくればたくさん見つかります。そのため、授業では教科書を丁寧に読むことを基本としています。中学 3 年生とは言えども、教科書を丁寧に読んでいくうちに必ず理解が不十分な箇所に突き当たります。そのような不完全な理解を穴埋めしていくことで、中学校の総復習とすることができます。

中学校の内容を丁寧に復習することは、高校の英語の授業の準備にもつながります。高校の英語は、中学校と比べて数倍の分量とスピードが要求されます。しかし、この要求は、中学の内容をしっかり押さえてさえいればそれほど無理があるものではありません。高校の教科書もまた、大部分は中学校で学習した内容の延長でしかありません。そのため、中学校の内容を明確に理解することが高校入学後の英語学習の準備にもつながります。そのことを見据えて、本授業では、かなり細かい部分まで含めた教科書の読解を行ってきました。

（文責 Fujita ）

『ウェブ・プログラミング入門』（講師 Fujita）



「高校･一般クラス」 新学期･木曜8：10～9：30開講！

現在、多くの人がインターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用をしている人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ね XHTML と CGI（Perl）を扱う予定です。XHTML は、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGI は、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

「中１数の基本」　担当　宇梶 卓（まさる）

数学の授業では、おもに中学の数学の基礎作りに取り組んできました。
数学という科目は、積み重ねが重要ですから、基礎の問題演習をおろそかにしないようにしています。応用問題を解く際には、多分に発想力を必要とするものでしょうが、それもまたしっかりした土台に基づいてこそ生まれてくるものです。
中１ぐらいになると、数学の好き嫌いがかなり明確に分かれてくるのですが、数学が嫌いという生徒の多くは、ある種の悪循環に囚われていることが多いです。つまり、問題が解けない、だからやる気が出ない。やる気が出ないから問題を解かない、すると力がつかないから一層解けなくなる。数学ではとりわけこの悪循環が色濃く出ます。この悪循環を回避するため、僕はできるだけ生徒の側にいて、手取り足取り解説をすることにしました。簡単な問題が解けないからといって、それをあげつらっても何にもなりません。しつこいほど丁寧に指導することで、生徒は少しづつ問題を解けるようになり、それが自信となって自分から主体的に問題に取り組めるようになる。僕はそのことを生徒たちから教えられた気がします。
そのことを考えるにつけ、数学嫌いというのは、本性的なものではなく、多分に作られたものであるという確信を深めるに至りました。汗をかかなければ実力は身につかない。それは生徒についても先生についても言えるのだと思います。

（文責　宇梶 卓）

「中３数の基本」　担当　下村昭彦

中３クラスでは１ヵ月後に迫った公立高校入試に向けて、追い込みをしています。京都府公立高校の数学の入試問題は広い範囲からかなり深い内容まで出題され、高得点を得るためにはすべての単元をまんべんなく理解していることが必要です。そこで、まず 12 月末に冬期講習を行いました。冬期講習では公立高校入試過去 5 年の入試問題を、本番と同じ時間制限で解き解説するということを行いました。また、最終日には予想問題を同じようにして解き、実力を確認しました。
さらに、年が明けてからは毎回予想問題を時間を計って解答してもらっています。時間を計ることで、時間配分する力、残り時間わずかでもぎりぎりまで粘る力を付けてもらおうとしています。最初は戸惑いもあったようですが、最近では気合を入れて問題に取り組むことができています。得点も確実にあがってきました。
うれしい知らせもあります。模試の結果を持ってきてくれました。数学が他の教科に比べたら多少得点できていないことは残念でしたが、全体としては申し分のない結果でした。実際、普段教えていて秋頃とは確実に違うという手ごたえがあります。このまま、最後まで突っ走れば桜の開花は間違いないでしょう。
数学はなかなか成績の上がらない教科です。学んでいく中で、挫折しそうになることもあるでしょう。でも、そこを乗り切れば必ず努力は報われます。生徒がそのことを教えてくれました。あとは、吉報を待つのみです。

（文責　下村昭彦）

―高校生・一般の部―

「高校・日本語の読み書き」　担当 某

「変わること／変わらないこと」

高校生クラスは、秋学期から冬学期にかけてヤスパースの『哲学入門』を使って、その内容の要約と論述を行ないました。中学生クラスのアリストテレスとはちがって、こちらはぐっと抽象度が高いのですが、去年のプラトンから継続して記述を行なっているためか、かなりまとまった文章が書けるようになってきており、これは大きな進歩だと思います。

また、大学進学へ向けての進路相談や入試対策についても、いろいろと話す機会がありました。大学の学部選びについては、「自分の興味関心がどのようなものであるのか、慎重に熟慮したうえで選んでください」ということがよく言われますが、特に僕自身の体験を踏まえて言えることは、これは必ずしも最善の選択でないことも多いのではないか、ということです。つまり、人間の興味関心というのは変化するものだということが忘れられているのではないかと思うのです。

大学は学部で 4 年間あります。4 年もあれば、自分自身だけではなくて、自分を取り巻く環境も変化します。変化しないことと同じかそれ以上に、変化することのほうが多いのではないか。また、自分の考えのなかの変化しない部分はずっと大切にしつつ、変化した部分もまた自分自身であることに変わりないので、その変化を受け容れることのできるような選択をしたほうがよいのではないか。妥協するのではなく、納得のゆくような進路決定が出来るよう、本人の意志を尊重しつつサポート出来ればと思います。

（某）

「高校・数と自然」　担当　下村昭彦

高校 2 年生もそろそろ終わりが近づいてきました。文系を目指す生徒は、高校で習うべき数学をすべて学んだことになります。高校数学は中学までと異なって多岐にわたり、難しい単元も多かったと思います。よくがんばりました。

現在、高 2 クラスでは微分積分を教えています。数学 II のヤマ場であると同時に、極大極小で 2 次関数で最大最小を求めたことを思い出すなど、高校数学の集大成ともいえる分野ではないでしょうか。今までとはまったく異なった概念が必要となる単元なので、なんとかめげずにがんばってもらいたいものです。

高 2 クラスでは 2 年生の範囲を予習復習するとともに、1 年生の範囲(数 I・A)の復習も行ってきました。なかなか、1 年前のことを思い出すのは難しいようです。ですが、何度でも解けるまで復習することで、次第に力がついてきたように思います。何度も書いてきたことですが、数学にとって最も重要なことは解けるまで繰り返すこと、そして解いた問題は覚えることです。高 2 も終わりになって、それらのことを無難に実践できるようになってきたのではないでしょうか。

春からは新学年、そしてそれは受験の年でもあります。だんだん緊張感が増してくると同時に、夢を描けるかけがえのない時間でもあります。たとえ微力であっても、描いた夢を実現できる手助けをできれば、それは望外の喜びです。

（文責　下村昭彦）

「高校・数の世界Ａ」　担当　福西亮馬

現在はＴ君という生徒とマンツーマンで、『組み合せ論』という分野をしています。１つ２つと物事を数え上げる数学です。たとえば、「千円を小銭で払う方法は何通りあるか」とか「八角形の頂点を結んで作れる三角形は何種類あるか」といった問題がそうです。もれなく、かつ数えすぎがないように…と数え上げようとすると、すぐに頭がこんがらがって来るでしょう。（ちなみに後者の問題は56が答で、${}_8C_3=56$という計算方法をまだ学校では習っていなかったＴ君は、粘り強く場合分けをして答を出したいきさつがあります）

１つ２つ…と数え上げることは実際、誰でもできる作業です。ただその「当たり前」という意識が引っかかって、途中で数えるのが嫌になったり、隠された法則を見抜けずに諦めてしまうことの方が多いものです。けれどもそうした困難の中で、効率よく数え上げる糸口を見つけた時には、精神への直接の喜びがあります。それこそが「自分は数学をしている」という実感なのです。

Ｔ君はもともと、幾何学で補助線を引くようなひらめき、いわゆる数学的なセンスをもっと磨きたいという理由で来られましたが、昔からそのように数学を好きになるためには、できるだけ若いうちから、「幾何学」「整数論」「組み合せ論」のどれか１つでよいから、それを十分堪能することだと言われています。彼の場合は、これまでの授業の様子から、３番目が一番適しているように思われたので、それを勧めている次第です。

できるだけその生徒に合いそうな数学（教科書ももちろん含まれます）に興味を持ってもらおうと考えていますので、ぜひ高校生で、数学に多少の腕に覚えのある人は、このクラスに参加してお互いを切磋琢磨してもらえることを希望します。

（文責　福西亮馬）

「高校・数の世界Ｂ」　担当　福西亮馬

現在２名のクラスです。それぞれ違ったことをしてもらっています。

一人は『教科書』をしています。教科書はぜひ、どんな人でも、もう一度開いて、「例」「問」「章末問題」を解き直してほしいと思います。今一度できるかどうか、見つめ返して下さい。できたなら、それはかなりの自信となります。

数Ⅱの教科書で学ぶ三角関数（sin,cos）と対数（log）は、もし将来理系を考えているのであれば、今から修練を積んでおかなくては先が危ぶまれます（それは漢字の書き取りのようなもので、後からでは特訓が難しいのです）。また同じ理由で、数Ｂのベクトルもおさえておいて下さい（大学で「線形性」という重要度の高い概念をとらえる時に、「ああ、これって大事だったんだなあ…」と後悔することになるからです）。

そしてたとえ、文系に進むとしても（こうした分け方をすること自体、私はあまり好きではないのですが）、自分の知らない世界が広がっていることに、肯定的なイメージを形作っておくことは、必ずやその人の持つ知性の幅を広げます。

もう一人の生徒は『整数論』をしています。それは彼が一番好んでいる分野です。高校で習わない範囲ですが、「整数論は数学の女王である」と言われるくらい、数学を好きになってもらう王道です。彼には『大学への数学』の別冊問題集を解いてもらっています。

（文責　福西亮馬）

「ラテン語入門」　担当　前川 裕（ゆたか）

ラテン語入門では、『ラテン語初歩』（岩波書店）を主なテキストとしてラテン語の初歩から講義をしています。学期により受講生のレベルはさまざまですが、早めに文法を終えれば希望のテキストを読み進めています。初歩からでも、１学期（約３ヶ月）で初級文法を終えることは十分に可能であることは、過去の受講生の実績からも証明されました。

ラテン語を学ぶ動機も人それぞれですが、できるだけ学ぶ興味にあった教材・題材を使うように工夫しています。ラテン語は本来は二千年前くらいの時代に主に使われていた言葉ですが、現代文学でも翻訳があります。ピーターラビット、『星の王子さま』、『不思議の国のアリス』、『くまのプーさん』といった文学作品にもラテン語訳があります。見知った作品をラテン語で読んでみるというのも、また面白いものです。

「ラテン語って、なんか興味はあるんだけど難しそうで…」という方こそ歓迎します。ラテン語の遺産は現代語にもさまざまな側面で引き継がれており、「こんなところにまで？」と思わされるほどです。人生、退屈している暇はありません。ラテン語を始めれば、人類最古の遺産のひとつに直接触れることができます。

志ある人を、山の学校はいつでもお待ちしています。

（文責　前川 裕）

「ラテン語講読 A」　担当　山下太郎

このクラスではキケローの『老年について』を読んでいます。

まもなく最後まで読み切ることができそうです。ここまで来るのにまる二年かかりました。参加者の真摯な取り組みにはいつも脱帽です。昨日の授業を終えたとき、しみじみと「これは原文で読まないと面白くないですねぇ」とのお声をいただき、私も大きく頷きました。タイトルだけ見ると、老人向けの作品のようですが、内容を読むにつれ、この作品は人生の大海に船出する若い人向けの必読書だと痛切に感じます。私自身「死を思って生きる」ことの意味を深く考えるようになりました。４月からは参加者一同の希望で、キケローの学問論、文化論満載の『アルキアース弁護』を読む予定です。

（文責　山下太郎）

「ラテン語講読 B」　担当　山下太郎

このクラスでは長らくセネカの『幸福な人生について』を読んできましたが、内容的に一段落したので、今は、ウェルギリウスの『牧歌』を読んでいます。

これは、全部で１０の作品から成るバラエティ豊かな詩集です。各々の詩で扱うテーマは今も斬新に感じられ、とうてい二千年前の作品とは思えません。音楽にせよ絵画にせよ、ヨーロッパの芸術には、田園生活に憧れを持ち、それを賛美する伝統がありますが、その美意識の基礎を作ったのがこのウェルギリウスです。私自身、文法の解釈が正確にできても、一語のもつ意味の広がりが多様に重なり合うため、散文のようにすいすい理解が進みませんが、古典語の読解ですので、スピードを競う必要はどこにもありません。

（文責　山下太郎）

ウェブ・プログラミング入門

時間　木曜8：10～9：30
日程　4月14日～7月6日
対象　高校・大学・一般
場所　山の学校

index.cgi

```
        push( @items, new Link( $user->name(), list_url() ) );
        push( @items, [
            new Link( Word->new( "Option" ), mode_url( "option" ) ),
            new Link( Word->new( "Logout" ), logout_url() ),
        ] );
    } else {
        push( @items, Word->new( "User" ) );
        push( @items, [
            new Link( Word->new( "Login" ), login_url() ),
            new Link( Word->new( "Register" ), register_url() ),
        ] );
    }

    # RSS
    push( @items, Word->new( "RSS" ) );
    my( @rss ) = ( new Link( Word->new( "LoungeRSS" ), rss_url( "lounge" ) ) );

    my( $menu_mode, $menu_id ) = @_;
    if ( $menu_mode && $menu_mode eq 'category' ) {
        push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url
( "category", $menu_id ) ) );
    } elsif ( $menu_mode && $menu_mode eq 'topic' ) {
        use Topic;
        my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id )->category_id();
        push( @rss,
            new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category",
$category_id ) ),
            new Link( Word->new( "TopicRSS" ), rss_url( "topic", $menu_id ),
        ) );
    }
    push( @items, \@rss );

    # Search Form
    my( $search_title ) = Word->new( "Search" );
    my( $search_word ) = utf8( $q->param( "find" ) ) || Word->new( "Search" );
    #push( @items, { STRING => $search_title, HREF => search_form_url() } );
    push( @items, $search_title );
    my( $checked ) = '';
```

100%

▶概要

現在、多くの人がインターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用をしている人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ねXHTML と CGI（Perl）を扱う予定です。XHTML は、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGI は、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

お問い合せ

学校法人北白川学園・山の学校　〒606-8273 京・左京区北白川山ノ元町４１
TEL 075-781-3215　taro@kitashirakawa.jp